

地域に学んだ「トライやる・ウィーク」

問い合わせ 学校教育課 ☎38-2087

市内3中学校の中学2年生が地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」は、皆さんにご支援いただきながら終わりました(県立芦屋国際中等教育学校は11月13日から17日に実施)。生徒たちにとって、地域の皆さんと触れ合い、「働くことの意味」を考える貴重な体験となりました。

また、生徒の活動状態は真剣で、どの事業所からも良い評価をいただきました。これも、推進委員会の皆さんのご協力や各事業所皆さんの支えがあったからだと思います。地域の皆さんからも、温かい声をかけていただき、生徒たちは大変元気づけられました。今後とも、地域の皆さんのご理解とご支援をお願いします。

エルホーム芦屋での活動(6月12日~16日) 大島 結(精道中学校)
エルホームでは、まず高齢者のかたのお迎えから始まります。エルホームは、高齢者のかたの生きがいになっていることが感じられました。レクリエーションもしました。年はすぐ離れているけど、同じことで笑えて、すごいなと思いました。折り紙で、はねるカエルを教えてくださいました。ほかにもお手玉やオセロを一緒にしました。楽しかったです。会話が続きたり、お礼を言われたり、ほほえんでくれたりするだけで、とてもうれしかったです。こんな小さなことをうれしいと感じられた「トライやる・ウィーク」はとてもいい経験になりました。

ロイヤルホストでの活動(6月12日~16日) 山田 圭太郎(精道中学校)
この1週間は、たくさんの人とふれ合い、色々な体験ができ、僕にとって本当に充実した1週間でした。初めて自分の作った料理をお客さまに出すのは不安だったけど、「おいしかったよ」と言われた時にうれしかったし、同時に「仕事のやりがい」というのはこういうことなんだと身にしみて感じました。5日間の「トライやる・ウィーク」で、僕は「働く」ということについて学び、そのすばらしさについても知ることができました。この素晴らしい機会を与えてくださったロイヤルホストの皆さんには、心から感謝したいと思います。この5日間、本当にありがとうございました。



岩園保育所での活動(5月29日~6月2日) 池田 一輝(山手中学校)
小さな子たちと接するときは、自分の考えを伝えたり、言われたことを理解するのが少し大変でした。だから小さな子たちの気持ちになって考える必要がありました。ここで、人を理解することを学びました。このことはどんな人に接するときにも大切なことだと思います。たくさんの方々に積極的に取り組むと、自分は疲れるけれど、かわりに誰かが助かって、喜んでくれる。毎日仕事を頑張っている親はすごいと思います。感謝しようと思いました。



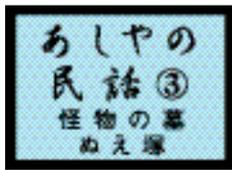
あゆみ保育所での活動(5月29日~6月2日) 浦山 薫(山手中学校)
散歩で疲れて歩けなくなった子をおんぶして帰っている先生を見ていて、やっぱりいつでも優しいんだなと思いました。園内で遊んでいるときに、一人ひとりの個性を感じました。砂で遊んでいる子どもたちが同じおもちゃを持っていても、使い方が少しずつ違い、個性が表れているように感じました。担当して下さった先生方、楽しそうに遊んでくれた子どもたちに、とても感謝しています。最終日に別れるのはとてもつらかったです。5日間で学んだことを、次に生かしていきたいです。



渡辺産婦人科での活動(6月5日~9日) 松崎 愛(潮見中学校)
私が産婦人科を選んだのは、いくつかある夢のひとつに助産師があったからです。最終日、私は前日生まれた赤ちゃんを抱かせていただきました。その子をじっと見ていると、すごく強い生命力を感じました。今まで羊水の中という全く違う世界で、肺呼吸もしていなかった赤ちゃんが、生まれた瞬間に肺がふくらみ呼吸ができて、人間として生きていけることに驚き、私も同じように誕生したのだと考えます。すごいなと思いました。今回、トライやる・ウィークに行ってお母さんのすごさと、赤ちゃんの生命の尊さを学びました。将来私は、この経験を通して前よりも助産師という仕事に興味がわきました。そして、一所懸命がんばって夢が実現すると思います。



インターナショナルスクールでの活動(6月5日~9日) 大林 里菜(潮見中学校)
インターナショナルスクールは、幼稚園や小学生を対象に英語で授業を行っている学校です。毎日、小学校クラスの漢字やそろばんを教えました。はじめは「漢字きらい」とか「こんなのわかんない」と言っていた子が、私が教えてあげると、「わかった」と笑顔で言ってくれました。その一言で教えるのがとても楽しくなりました。しんどくても笑顔でいると、子どもたちも笑顔でいてくれるので、それを見て自分が元気になれました。これからは、つらいとき、しんどいときこそ笑顔でいようと思います。



文・三好美佐子さん
絵・竹本温子さん



むかし、むかし、
天皇が住んでおられる京の都の御所に、毎夜あやしげな鳥の鳴き声が響き、そのたびに天皇はわけもなく苦しめられていた。
その鳴き声は、ぬえの鳴き声に似ていたが、姿を見た者はだれもいなかった。天皇は、えらい坊さまに拜んでもらったりしたが、効き目もなく、人々もそのことを恐ろしかった。
そこで、弓の名人といわれた、源頼政(みなもとのよりまさ)に、あやしげな鳥を射落とすよう命じられた。
頼政は、御所にとまりこみ、鳴き声のするのを待ってあった。

その夜、いつも現れる時刻に、東から、黒い雲が、むくむくとわき出て、鳴き声が聞こえてきた。頼政は、その方を見た。まさに黒雲の中に、鳥のようなものが見えた。
頼政は、手にしていた弓矢をにぎりしめた。
「よし、かならず、射落としてみせる」と、弓に矢をつがえた。
矢は、ひよつと放たれ、みごと一矢で怪物はしとめられ、雲間から落ちてきた。人々はてんでにばかりを持って、怪物の死がいに近づいた。
なんと、怪物は、頭はサル、からだはタヌキ、手足はトラ、尾っぽはヘビ、まことに、恐ろしい姿をしてあった。
あまりのすさまじさに、京の都の人たちは、たたりを恐れた。
天皇も人々に災いがあると思われるので、か、
「これを、西の海に流すように」と、おせられた。

木の中をくりぬいた舟に寄せられ、桂川に流された。
死んだ怪物を乗せた舟は、流れ流れて、芽湊(ちぬ)の海に出た。
おだやかな芽湊(ちぬ)の海は、うつぼ舟をやさしく抱き、ぬえの怪物のたましいをなぐさめた。
ついに舟は、芦屋の磯に、流れついた。はじめて見つけたのは、海で漁をしていた漁師であった。
「えらいもんが、流れてきたでえ」
浜にいた人たちが、その声で寄ってきた。
「なんや、死んでるなあ」
「けつたいな、もんや」
「ほつといたら、たたりがあるかも知れん」
海べの人たちは、京のできごと、天皇のいつくで流されたことも、ぬえという名でよばれていることも、何も知らなかった。
けれども、このままほっておくこともできず、みんなで集まって、話しあうた。

「ここへ流れてきたのも、あしやに縁がある。それに、あととどんなたたりがあるかも知れん」
そういって、うつぼ舟のまま、芦屋川のほとりに埋められた。
ところが、なん年かたったころ、浜に、怪物の亡霊が現れるといううわさが広がった。
「ひーひー」
と鳴くぬえの音がしたかと思うと、海のかなたから、うつぼ舟に乗った怪物の亡霊がやってくるらしい。
それも、ま夜中のことで、だれも見た者がいない。
ちよつと、そのころ、あしやの浜を旅をしている坊さんが通りかかった。
そのうわさを聞き、坊さんは、頼まれる



ままた、浜のお堂にとまりこみ、亡霊の現れるのを待った。
「ひーひー」の声とともに、亡霊が現れた。
「自分こそ、都で頼政に殺された、ぬえの亡霊じゃ。妖怪や、化鳥じゃと騒がれ、怪物が逃げ出せないという、うつぼ舟に閉じ込められたぬえじゃ」
その声は、怒りと、悔しさが忘れられず、あの世とこの世をさまよっているぬえであった。
言うだけ言うた亡霊は、海へ帰っていった。
旅の坊さんは、ぬえの亡霊からその話を聞いて、あわれに思い、海に向ってお経を上げ、ぬえのたましいをなぐさめた。うつぼ舟とお経が浜辺に響くと、亡霊も消え、月が海を照らしはじめた。
それからは、ふたたび亡霊は現れなかった。
土地の人は、その後、ぬえをうつぼ舟から出し、りつばな塚に葬ったという。
この塚は、今、芦屋川に沿った、旧国道の南方に残されている。
「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。